The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『夜窓鬼談』における「画中人」物語の改作と展開について
Author(s)	聶, 晶
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 71-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54553
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『夜窓鬼談』における「画中人」物語の改作と展開について

聶晶

1　はじめに

「画中人」という主題は、中国の古典怪談の一類型であり、絵、屏風や掛け軸などの中に描かれている人物が紙や布から抜け出し、主人公と交際するという話を指す。このモチーフには、主に美人画から出てきた女性と人間の男性とが恋愛をするという展開が多く、最古の記録は、唐の『松窓雑記』にある「真真」という話だと思われ、その後、「真真」を倣作した類話も数多く生まれた。例えば、『松窓雑記』[1]には、主人公が美人画の中の女を呼び出し、自分と結婚し子供が産んだという話があり、怪談随筆集の『夷堅志補』の巻十[2]には、書生が美人画の中の女との縁を結び、その後別れてしまうが、彼女の予言通り、彼女の顔とそっくりな女性と結婚したという物語が描かれている。そのほか、随筆の『輟耕録』[3]、昆曲の『牡丹亭』[4]、怪異小説集の『聊斎志異』[5]などの作品の中にも、画中の美人との恋物語が描かれている。

一方、日本明治期の漢文怪異小説集の『夜窓鬼談』の中にも、類似する話があり、それは「画美人」という一編の作品で、日本人の書生と清国の美人画から出てきた女性との恋愛物語を描写したものである。この話は、中国の唐伝奇小説からヒントを得て作られてきたのであるが、作者のオリジナルの部分も看過できない。それでは、この「画美人」は、どのように改作されているのか、どのような特徴があるのか。これらの疑問を解明するために、本論は『夜窓鬼談』の「画美人」を中心とし、作品の内容と描写方法などの側面から比較・分析し、この話の源流と成立背景を明らかにしたい。

2　先行研究

劉守華(2002)の『中国民間故事類型研究』によると、「画中人」というモチーフは「人鬼夫妻」（幽霊と人間とが結婚すること）という類型の物語のバリエージョンであり、「冥婚」[6]という風習との関係もあるということがわかる[7]。この類の話は、凡そ人間と幽霊との恋愛や体に魂を憑依することや生き返ることなどというプロットと関わり、中国の古典小説と戯曲の中にも多数に見受けられる。

これについて、中国では、主にこの主題の成立背景と源流、宗教崇拝と民俗信仰との関係及び、

---

1 杜荀鶴（846－907?）、明の業書の『説郛』の46巻に収録され、刊行年は不明。

2 洪邁（1123－1202）、建久九年（1198）に成立した。

3 陶宗儀（1329－1410）、日本では承応元年（1652）に刊行された。

4 湯顯祖（1550－1616）、慶長三年（1598）に成立した。

5 蒲松齢（1640－1715）、成立年代は不詳。

6 生者と死者に分かれた異性同士が行う結婚のこと。陰婚、鬼婚、幽婚などとも呼ばれる。

7 劉守華ほか、『中国民間故事類型研究』、華中師範大学出版社、2002、pp.225－238。

作品の創作方法と文学性、芸術性などを中心に研究がなされている。特に、「牡丹亭」という昆曲作品を巡っての分析と考察が盛んに行われ、多くの研究成果が生み出された。例えば、王立(2008)は、「図画崇拝與画中人母題的仏経淵源及仙話意蘊」[8]と題した論文の中で、「画中人」というモチーフの流れ及び、仏教説話との関係を明らかにした。また、林書萍(2009)は「湯顕祖『牡丹亭』及晩明時期改作与倣作之研究」[9]と題した論文の中で、明の後期に成立した「牡丹亭」についての倣作を考察し、それらの成立理由と改作方法を分析し、さらに明曲の最高傑作としての「牡丹亭」の文学的価値も言及した。ただしこれまでの研究の中に、『夜窓鬼談』における「画美人」という話についての分析は管見では見当たらない。

3　『夜窓鬼談』における「画中人」物語とその類話

『夜窓鬼談』[10]は、幕末明治の漢文学者の石川鴻斎[11]が書いた漢文怪異小説集であり、上巻と下巻全 88 編で、それぞれは明治二十二年（1889）と明治二十七年（1894）に出版された。上巻の第 17 編である「画美人」のあらすじは、以下の通りである。

藤子華は、旗本の侍である。父は要職にあったが、華は官職がなく、青山別荘という屋敷に住んで、暇があれば、屋敷内の花に水をやったり、詩を詠んだりしていた。偶然に、長崎に赴任している親戚から清国の画師が描いた優れた美人画をもらった。華は、この美人画を部屋に掲げ、大切にしていた。さらに、画中の少女の美貌を称え、漢詩を作った。

ある真夜中、画中の少女が紙から飛び出し、華に話し掛けてきた。彼女は、小麗という名前で崔氏の娘であり、太平天国の乱で、家族と生き別れて遊郭に売られていたが、半年後、逃げ出して仙人の中に身を投じたと言った。華は小麗を憐れみ、二人とも漢詩を書いて互いに贈った。しかし、目が覚めると、なんと夢であったと気づいた。ただ一夜ではなく、その後も華は度々小麗のことを夢で見て、夢の中の二人は恋仲となり夫婦となった。このようにして半年が過ぎたが、ある夜、夢で小麗は「私たちの縁が無くなったので、もう離れなければならないが、また会えるでしょう」と別れを告げて消えてしまった。華は非常に悲しんだ。月日が経ち、親類縁者が結婚を勧めて来たが応じなかった。しかし、母からの再三の勧めにより、小麗の最後の言葉を思い出し、ついに結婚に同意した。結納を交わすと、美人画がなにやら生気がなくなった。吉日を選んで花嫁がやって来た。その花嫁は、小麗とそっくりだった。

「画美人」は、一枚の美人画を通じ、書生と画中の女との恋愛怪異譚を描いた。内容からする

---

8 王立、南開学報（哲学社会科学版）2008 年第 3 期、2008、p.72。

9 林書萍、中国文学系学位論文、2009、pp.4－5。

http://thesis.lib.nccu.edu.tw/record/#G0901510071（2014.11.02）

10 吾妻健三郎 編、東陽堂支店、1889。

11 （1833－1918）日本の詩文家、漢学者、画家。本名は英。字は君華。通称は英助。芝山外史、雲泥居士などの号がある。

と、中国の志怪小説の『夷堅志補』[12]巻十にある「崇仁呉四娘」という話と非常に似ている。「呉四娘」のあらすじは以下の通りである。

臨川に、張という書生がいた。科挙を受けに行く途中に、泊まった旅館で一枚の美人画を手に入れ、画中の美人の名前は趙四娘と言われた。張はこの美人画によって恋煩いにかかった。詩を作り、求愛すると四娘は画から飛び出してきて、彼と縁を結んだ。ある夜、四娘から「私たちは、別れなければならない。あなたは今年落第だが、帰省して結婚すると、また会えるでしょう」と別れを告げて消えてしまった。張は悲しみ、そのうえ科挙も落第をして故郷に戻った。四娘の話通り、崇仁の呉氏の娘と結婚した。花嫁が来ると四娘と非常に似ていて、さらに彼女は兄弟の中でも四番目の子である。ある日、張は自分が結納を交わす時に、密かに画師を頼み、呉娘の似顔絵を描いてもらったという冗談を言った。妻の呉娘はそれを全く信じない、張は趙四娘の美人画を取り出すと、やはり呉娘の容貌と全く同じであった。

この二作のプロットを比較すると、主人公が画美人と恋愛すること、そして主人公が画美人の予言の通りに彼女とそっくりな女と結婚することという二つの所はほぼ同じである。しかし、『夜窓鬼談』の「画美人」の中で、書生がどのように美人画を手に入れたのかという部分が変わり、また、「呉四娘」にある書生の科挙に参加して落第すること及び、結婚後の冗談などの部分も省略された。実際には、主人公が画美人の予言の通りに彼女とそっくりな女と結婚するというプロットは、中国のほかの恋愛怪異譚の中にも見られる。そのため、「画美人」は、直接に「呉四娘」からヒントを得たかもしれないが、他の中国の怪異譚から影響を受ける可能性も否定できない。しかし、中国の類話と比べると、作者が新たに改作した部分があることも明らかである。

4　「画美人」の改作特徴

それでは、「画美人」の設定と話の展開からみると、どのような新しい特徴があるのか、以下のような分析を試みる。

(1)主人公の設定

「画美人」中の主人公は二人いる。一人は、日本人の書生の藤子華で、もう一人は、清国の娘の小麗である。これは、一般的な翻案方法で、日本を物語の舞台とし、幕末の時代を物語の背景としている。こうすることにより、主人公たちの身分上の違いは、人間と幽霊だけではなく、出身、文化の相違も際立たせることができる。

それでは、なぜ作者は、わざわざ国際恋愛という設定をしたのか。なぜ主人公の一人である書生を日本人としたのか。なぜ浮世絵ではなく、「清国の美人画」という背景を用いたのか。もちろん作品の物語性を深めるため、あるいは中国の類話から着想を得たためとも考えられるが、おそらく後半部分の書生が漢詩を作るというプロットを生かすためと考えるのがもっとも妥当であろう。

---

12 洪邁（1123－1202）、慶元四年（1198）に成立し、206巻がある。

小麗は清国の娘で、詩文の教養もあり、それゆえ、書生との間に、漢詩で自分の思いを互いに伝え合い、疎通するというプロットが自然な運びとなっている。このようにすると、作者は漢詩を自然に作品の中に入れ、物語の文学性を高めると同時に、読者にも漢文についての知識を与えていた。これも、作者が『夜窓鬼談』の序で書いた「若者に啓蒙をする」という小説の創作目的と一致した。

(2)三段の漢詩

前述したように、「画美人」の中に、三段の漢詩がある。それらは以下のようである。

窈窕また妖嬈、今春僅に二八。艶顔李花の如く、蛾眉纎月に似たり。朱膏殘葩を點じ、素手雪よりも白し。さらに鉛粉を假らず。香膩自然に潔し。朱簪と金釵とは、鬢髪光彩發す。弱質輕羅を纏ひ、細腰繡紱を垂る。手、小團扇を携へ、袴下、錦襪を見る。嗤然として輔靨生じ、盱瞜腦を殺せんと欲す。妙畫、精神を來たし、誰氏の筆かを識らず。さらに憐む故郷を去り、海を蹈みで良匹を求むを。何ぞ圖らん宿世の縁を。冰人我室に伴ふ。西施五湖に沈み、太真黄鉞に死す。佳人、名將とともに、白髪を見るを許さず。汝は是れ紙上に在り、惸然として貞節を守る。老ひず、又た衰へず。憂ること無く復た疾むこと無し。恨らくは衾枕を共にして、我と歡悅を為さず。

（略訳：姿は美しく艶やかで、歳は十六歳。李の花のような綺麗な顔、細き月のような美しい眉毛。赤い唇には散り残った花の色をつけ、手は雪より白い。さらに化粧もしておらず、素肌は自然に白く、ほのかな香りがする。真珠と金の簪は黒い髪の毛につけ、光を帯びて輝く。なよやかな体に薄い衣を着て、細い腰には飾り紐が垂れている。手には小さな団扇を持ち袴の下には色糸の足袋が見える。微笑む顔には笑窪がある。瞳を見ると心は乱れてしまう。すばらしい絵で魂が宿ったようだ。これは、いったい誰の作品であろうか。故郷から離れ、よい恋人を求めるために海を越える。運命の宿縁であろう、あなたは仲人に連れられて、我が家にやってきた。西施は五湖に沈み、楊貴妃は黄鉞によって殺された。美人と名将とともに老衰することが恐ろしい。あなたは紙の上に、一人で貞節を守る。老いず衰えず、憂えることと病に罹ることもない。私と枕を共にして悦びをともにできないことは悲しいだろう。）

茫茫たる九土暗雲横たわる、獨り見る崔娘洛城を出るを。誰か計らん、蓬萊、畫舫を留め、碧桃花下、文成に遇わんと。

（略訳：茫茫大地に暗雲が垂れ込める。崔氏の娘一人で都の門を出るのを見える。誰も予想できなく、その娘が蓬萊に畫舫を留めることになり、桃花の下で文成と出会う。）

堪へず磊塊寸胸に横たわる。吐きて作る延長五字の城。妾や菲才、鄭婢に慚ず。小詩爭でか康成に對ふることを得ん。

（略訳：心には言い難い思いがいっぱいある。この五言の詩でその思いを言い出そうと思うが、私は文才がなく、鄭玄の下女にも及ばないので、鄭玄に詩を返すことはできないだろう。）

一段落目の漢詩は、小麗の年齢、外貌、表情、衣装、動作などを詳しく描写し、また、書生が小麗を慕っているという感情も示している。二段落目の漢詩は、小麗が一人で逃げ出し、仙人と出会う経歴を描いた。三段落目の漢詩は、二段落目の漢詩の返詩であり、小麗は謙虚な態度で自身文才がないという内容を書いているが、実際には自分の文才を表現したのである。

この三段落の漢詩は、美辞麗句で文章によどみがなく、韻の踏み方も優れている。その物語のロマンチックな雰囲気を表現していると同時に、「西施」、「太真」、「佳人名將とともに、白髪を見るのを許さず」、「九土」、「蓬萊」、「文成」、「鄭婢」、「康成」などの典故と諺、熟語も見られる。これは、若者に漢文の技法を示し、知識を与えながら、作者自身の漢文力、詩文力を表しているのだと考えられる。

(3)名画に対する評論

作品は、以下のような評論によって締め括られている。

「世に傳ふ、名畫の靈に通ず。韓幹の畫馬、足を傷みて醫を求め；張僧繇の畫龍闘って、風雨を起こす；本邦、金岡、元信らの畫、亦た相ひ類する者有り。固より信ずるに足る者無し。設名畫盡く、神を來し活動せば、麟鳳市に遊び、龍門街に闘ひ、官、驅逐に遑あず、民亦た害に遭ふこと少なからず。畫工の罪、逃るべからざるなり。」

（略訳：伝説によると、名画には魂を宿したものがある。例えば、韓幹が描いた馬は足に怪我をして医者を訪ねたことや、張僧遙が描いた龍は風雨を起こしたことなどがある。我が国でも金岡、元信など有名の画家の画について同じような話がある。実際のところは信じられない話であろう。もし、すべての名画に魂が宿り、描かれたものが動けば、麒麟や鳳凰が市内で散歩し、龍や虎が市中で争う。こうなると、官庁はこれらを駆逐することの困難に直面し、住民にも多くの被害が出る。それなら、画家たちは罪を免れることができなくなるだろう。）

作者は、幾つかの名画家に関わる伝説を例としてあげているが、「もとより信じられない話である」という結論を下した。これは、画美人の物語に対して反論が示され、作者の理性的な見解も反映されたのである。一方は明治期怪異譚の一つの特徴ともいえる。当時、西洋科学の伝来に従い、「怪談神経病説」という思潮が流布していた。すなわち、幽霊などの怪異は実在するものではなく、見た人自身が神経病という心の病理で幻覚を見たにすぎないとするものである。石川は「神経病説」から影響を受けた上で、この結論を出した可能性が高いと考えられる。

さらに、一つの戯作も挿入されている。ある遊郭の店は、画師を雇って数枚の美人画を描いた。蝋燭を照らすと、美人画が本物になり、客を接待して商売繁盛になった。しかし、その後、この秘密を漏らされ、ほかの店は、同じように画師を雇って幾つかの虎を描いた。描かれた虎も本物になり、画美人たちから店主、使用人まで全員を食べてしまったという話である。特に文の最後に、「画に魂が宿ると、そこまでなるのか。なんと恐ろしいだろう」と記している。作品の面白さを高めながら、前述した「もとより信じられない話である」という点も強調したのである。それなら、作者は、なぜ自分が書いた「画美人」を否定したのか。これは、おそらく創作の傾向と

の関係があると考えられる。時代の発展に伴い、怪談の迷信と信仰性より、その娯楽性が益々広がり、民衆の日常生活の一つの楽しみになった。作者は、単純な怪異談よりも、怪談という形式の恋愛物語を書きたいという意図から、「画美人」を作ったかもしれない。一方、若者の読者がこの作品を読んだ後、画中の美人と恋愛したいという欲望から逃れられなくなるということを避けるために、石川が作品の最後に理性的な評論を付け加えた可能性もあると考えられる。

5　成立の背景

それでは、「画中人」というモチーフの出現は偶然であろうか。何か社会背景についての要素はないのだろうか。また、「画美人」という話の創作は、日本の民俗から受けた影響があるのだろうか。これらの疑問に答えるために、物語の歴史的背景に遡ってみる。

中国人物画の典型は六朝から唐代（3～10 世紀）に、顧愷之[13]、呉道子[14]などの画家によって作られたものである。六朝とは、中国史上で建康（健業）[15]に都をおいて、222 年から 589 年までの南方に存在している呉、東晋、南朝の宋・斉・梁・陳という六つの時代の総称である。この時期の文化に関して非常に重要な現象は、仏教が社会に普及したことである。仏教は 1 世紀から中国に伝来されるが、外来の宗教として庶民文化にあまり浸透しなかった。しかし、後漢末から五胡十六国までの時代は混乱が続く、仏教は当時の人々の救われたいという心理を捕らえ、民衆の中で徐々に広まっていった。仏教の隆盛とともに、仏寺、仏像、石窟、石仏なども多く建立された。同じ時期に、後漢末で興った太平道[16]や五斗米道[17]を起源とし、老荘思想に基づき、不老長生の神仙術、呪術や占卜などの要素が含まれている道教も成立した。宗教信仰の発展に従い、佛、神仙の像に対する崇拝は、最盛期に達した。これを背景として、人物画はいよいよ盛んとなり、ついに絵画の一流派として、美術史の舞台に登場した。このようにして「画中人」が成立する社会基礎が成熟したといえる。

また、封建社会では、自由恋愛は社会の秩序を乱すものとして禁止されていた。その感情を長い間抑圧されたため、文人らの欲望が「画中の美人と恋愛する」という想像の形式で爆発したのであろう。特に、画中の美人は顔が美しく、文才があり、性格も優しい。これは、男性の理想の女性像の表現だといえ、「画中人」物語の成立の思想基礎だと考えられる。

このような背景から、「画中人」というモチーフは、数多くの作品が生じ、航海業と印刷業の発展に伴い、漢籍の伝播により、漢字文化圏で広まっていった。

実際には、日本の怪談と伝説の中にも、「画中人」と似ている話がある。例えば、随筆の『落栗物語』[18]の前編には、壊された屏風が怪異を起こすという話があり、また怪談集の『伽婢子』[19]

13　（344?－405？）東晋の画家。字は長康。

14　（生没年不詳）唐代玄宗朝に仕えた画家。「画聖」と呼ばれ、山水画の画法に変革をもたらした。

15　中国南京の古称。

16　後漢末の華北一帯で民衆に信仰された宗教である。

17　後漢末に張陵が、四川省の成都近郊で起こした道教教団。

18　松井成教（?－1786）、江戸後期に成立した。

19　浅井了意（1612－1691）、寛文六年（1661）に刊行された。

の「屏風の絵人形」という編には、時の室町幕府管領の細川右京大夫政元が、寝ている時に、枕元にある屏風の絵に描かれている小人が飛び出して踊っているという話が盛り込まれている。

しかし、これらの作品の内容を分析すると、日本の「画霊」という信仰との関係があると考えられる。画霊とは、画、彫刻や屏風など、人間が作成した物には、魂や霊が宿ったものの総称である。多田克己（1990）の『幻想世界の住人たち』によると、「絵画が古くなって修復が必要となった際、修復せずに放っておくと、絵の中の人物が警告を促すものとし、付喪神の一種」[20]と解釈されている。付喪神とは、道具類が100年経過すると精霊がやどり、人に害をくわえるという俗信である[21]。これらの話の中のいわゆる「画中人」は、実際には画中の「人」ではなく、絵の精霊の正体であろう。日本の俗信として、中国の「画中人」モチーフとはあまり関係ないと考えられる。それゆえ、『夜窓鬼談』の「画美人」は、完全に中国の作品の改作だといえる。

6　おわりに

前述の分析によって、『夜窓鬼談』の「画美人」の特徴が浮き彫りとなった。この作品は、中国の「画中人」というモチーフの作品からヒントを得て作られてきたのであるが、作者は単純な模倣ではなく、多くの時代特徴と日本文化の要素を融合し、新しいプロットを作った。それは、①作品の主人公を清国の娘と日本の書生と設定したこと。②三段落の漢詩を書いたこと。③作品の最後の一段落には、「名画の中に霊が宿る」ということに対する評論が記されており、これによって特徴を際立たせている。

このモチーフは、中国での仏教と道教の隆盛によって発展してきたのであるが、また、封建社会の倫理、礼節、道徳の束縛から生じた想像も含まれている。一方、日本近世怪異譚における画霊譚は、付喪神に関わる話であり、人々に幸い或いは災いを与えるイメージが強いのである。これは、中国の「画中人」というモチーフとは似ているが、全く異なる類型の話だといえる。

石川鴻斎は、「画中人」というモチーフのもともとのロマンチックの雰囲気を残しながら、理性的な評論と考えも作品の中に加え、自身の稀にみる優れた文才と漢文力によって、新しい恋愛物語を書き、作品の文学的価値を高めると同時に、さらには物語としての娯楽性も加えた。

参考文献

石川鴻斎 著、小倉斉・高柴慎治 訳注、春風社、2003。

王雲五 編、「清波雑志・桯史・括異志・続幽怪録・南村輟耕録」『四部叢刊続編』、台湾商務印書館、1976。

王三慶ほか編、『日本漢文小説叢刊』第1輯・第2冊「筆記叢談類」、臺灣學生書局、2003。

王立、「図画崇拝与画中人母題的仏経淵源及仙話意蘊」『南開学報(哲学社会科学版)』、2008年03期、南開大学、2008。

華瑋・王瓊玲 編、『明清戲曲國際研討會論文集』、臺北中央研究院中國文哲研究所籌備處、1998。

20 多田克己、『幻想世界の住人たち』IV、新紀元社、1990、p.303。

21 諏訪春雄、『霊魂の文化誌－神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較研究－』、勉誠出版、2010、p.142。

京都国際マンガミュージアム 編、『図説妖怪画の系譜』、河出書房新社、2009。
洪邁 撰、何卓 點校、『夷堅志』、中華書局、1981。
国書刊行会 編、『百家随筆』、国書刊行会、1917。
小松和彦ほか編、『日本怪異妖怪大事典』、東京堂、2013。
小松和彦 編、『日本妖怪学大全』、小学館、2003。
桜井徳太郎、『民間信仰』、塙書房、1968。
桜井徳太郎 編、『民間信仰辞典』、東京堂、1980。
桜井徳太郎、『新編霊魂観の系譜』、筑摩書房、2012。
柴田宵曲 編、『怪奇異聞辞典』、筑摩書房、2008。
須永朝彦 編訳、『江戸奇談怪談集』、筑摩書房、2012。
諏訪春雄、『霊魂の文化誌:神・妖怪・幽霊・鬼の日中比較研究』、勉誠出版、2010。
多治比郁夫・中野三敏 校注、『当代江戸百化物』、岩波書店、2000。
多田克己、『幻想世界の住人たち』IV、新紀元社、1990。
高田衛・原道生 編、『叢書江戸文庫』、国書刊行会、1987。
高田衛 校訂、『近世奇談集成』、国書刊行会、1992。
太刀川清 校訂、『百物語怪談集成』、国書刊行会、1987。
陳蓮塘 編、『唐人説薈』、緯文堂、1864。
日本随筆大成編輯部 編、『蘿月庵国書漫抄』、吉川弘文館、1993。
根ケ山徹、『明清戯曲演劇史論序説:湯顕祖「牡丹亭還魂記」研究』、創文社、2001。
藤沢衛彦、『図説日本民俗学全集』第四巻「民間信仰・妖怪編」、中央精版印刷株式会社、1960。
林書萍、「中国文学系・学位論文」、2009。
http://thesis.lib.nccu.edu.tw/record/#G0901510071（2014.11.02）